

東屋の外には、人影がない。街灯が二本だけで、砂場も滑り台も、雨で白く煙っていた。

それでも、声を抑えきれなかった。

「声、外に抜けますよ♡」

耳元に、朝比奈さんの低い声が落ちた。

(知ってる♡知ってるのに、止められない——♡)

しこしこっ♡ぐりぐりっ♡きゅうっ♡

「んっ……！♡んっ……！♡」

シャツの下で、指先が乳首を絶えず擦り続けている。触れるたびに体が正直に跳ねる。

摘まれるたびに、引かれるたびに、自分でも信じられないくらい甘い声が漏れた。

(三十分前までは、ここで夜の公園を眺めていただ

けだった♡この人が隣に来て、話しているうちに雨が降り出したただけなのに、屋根を叩く音が強くなるほど、声をかき消してくれる気がして、余計に抑えが利かなくなる——♡)

「雨音にかき消されても、俺には聞こえています♡」
(この人だけに、届いている♡)

耳元でそう言われた瞬間、腰の奥がきゅうっ♡と縮んだ。

「んううっ……！！♡♡」



深夜二時の公園には、誰もいない。それが目当てだった。

仕事が終わって、飯を食って、風呂に入って、それでも眠れない夜が続いている。布団の中で天井を見上げているうちに深夜二時が近づき、気づくと着替えて外に出ていた。

最初は一度きりのつもりだったのに、いつの間にか習慣になった。

徒歩三分の公園。街灯が二本だけ立っていて、砂場と滑り台とブランコがあり、奥にはベンチを備えた東屋がある。

昼間は子供連れや犬の散歩で埋まっているくせに、深夜になると人の気配がまるごと消える。その静けさが、どういうわけか体に合った。

(今日も眠れなかった)

東屋のベンチに腰を下ろし、スマホを隣に伏せる。薄暗い公園の輪郭を目に入れながら、ただ座っているだけで、胸の奥に詰まっていたものが少しずつほどけていく気がした。

風は生ぬるい。今夜は湿気があって、遠くで雷でも鳴りそうな空気が漂っている。

空を見上げてても星は一つも見えず、分厚い雲がどこまでも広がっていた。雨が降るとしたら今夜だろうと思いながら、膝に肘をついた。

それでも、ここにいたかった。部屋の天井を見ているより、ずっとよかった。

「また来てる」

声がした。飛び上がりそうになりながら振り返ると、東屋の入口に男が立っていた。

年齢は僕より少し上に見える。ジョギング用らしいハーフパンツと、洗いざらしのパーカー。

手にはコンビニの袋を提げている。整った顔立ちをしているのに、立ち方がひどく気楽そうで、その落差が少し変だった。

「……また、って」

「毎晩いるじゃないですか、あなた。俺、あのマンションに住んでるんです」

男は特に悪びれもせず、東屋の反対側のベンチに腰を下ろした。顎で公園に隣接した建物を示す。

確かにここから見上げると、電気のついた窓がい

くつか見えた。

「三〇五号室から見えるんですよ、この東屋。夜中にカーテンを閉めようとする、たいてい誰かいるんで」

たいてい、というのは僕のことだろう。

（毎晩、見られていたということ……？）

「気持ち悪いとか思いました？」

男が缶コーヒーのプルタブを開けながら、こちらを見た。

ただ事実を確認するみたいに、淡々と訊いてくる。怖い顔ではない。

かといって、愛想がいいわけでもない。ただ、フラットだった。

「……別に」

「よかった。それなら、隣いいですか」

返事を待たずに、男は同じベンチの端へ移ってきた。それでも、間にはまだ一人分ほどの距離があった。

「朝比奈って言います」

僕も名乗った。何となく言葉を交わすうちに、眠れない夜が続いていることをぽつぽつと話した。

朝比奈さんは遮らず、時々「わかる」と短く返すだけだった。理由を問い詰めたり、解決策を押しつけたりしない。

その距離感が、今の僕にはちょうどよかった。遠くで空が低く鳴り、次の瞬間、大粒の雨が落ちてきた。

「しばらくやみそうにないやつですね、これ」

朝比奈さんが呑気な声で言った。雨脚はどんどん強くなり、東屋の屋根の端から水が流れ落ち始めた。

砂場はもうずぶ濡れで、街灯が雨粒を反射して光

っている。

「帰れないですね」

「……ですね」

二人で黙って雨を見ていた。

「ちょっといいですか。隣、座っていいですか。今度はちゃんと隣」

間にあった距離を見て、僕は少し横へずれた。

朝比奈さんが寄ってくる。腕が触れる距離になった。

「最初に見たの、三ヶ月前くらい」

突然、朝比奈さんが言った。

「えっ」

「ここにいるの。夜中に窓を開けたら、東屋に人が

いて。毎晩来るのがわかって、それから見るようになった」

「……それは、つまり」

「ずっと見てたってことです」

（三ヶ月。毎晩。）

僕が知らないところで、この人は僕を見ていた。

「なんで今、それを言うんですか」

「雨で帰れない今なら、少しくらい話せると思ったから」

「……それ、わざとですか」

「卑怯ですよ。自覚はあります」

（自覚はあるんだ……）

振り向くと、朝比奈さんがこちらを向いていた。軽口を言っていたときと同じ顔なのに、目の温度が少し違った。

「毎晩見てて、いい加減どうにかなりそうだったん

ですよ。だから今日、降りてきた」

朝比奈さんの手が、僕の手の手甲に重なった。手のひらが、じわりと熱い。

朝比奈さんの顔が近い。雨の音が大きい。

東屋の外は白く煙っていて、ここだけが暗い。

「嫌なら言ってください」

声が低くなっていた。返事に迷った。

三ヶ月も見られていたことには戸惑う。それでも、さっきまで話を聞いてくれた朝比奈さんから、今は離れたいと思わなかった。

目が合うと、小さく頷いた。朝比奈さんの手が、顎に触れた。

「……あ♡」

唇が重なった。やわらかく、押しつけるでも急ぐでもなく、確かめるみたいにゆっくりと触れてから

離れた。

「もう一回、いいですか♡」

「……はい♡」

今度は深く、角度を変えて。朝比奈さんの手が後頭部に回り、引き寄せられる。

唇の隙間から舌が入ってきて、僕の舌に絡んだ。

「んっ……♡」

甘い音が漏れた。自分の声だと気づくまでに時間がかかった。



缶コーヒーをベンチに置いた朝比奈さんに手を引かれ、立ち上がった。何度も唇を重ねるうちに、気づけば東屋の柱に背中を預けていた。

朝比奈さんが正面から覆い被さるように立ち、頭

の上で両手首を柱に押しつけている。動けない。

東屋は三方が開いていて、屋根を叩く雨の音が全方向から包んでくる。外の景色は白く煙っていて、何も見えない。

それでも、三方は開いている。小さな音まで、外へ逃げていく。

(誰もいない♡でも、開いている♡声が外へ抜ける——♡)

「声、外に抜けますよ♡」

朝比奈さんが耳元で言った。

「……わかってます♡」

「じゃあ、できるだけ我慢してください♡」

我慢、という言葉が落ちた瞬間、手首を押さえていた片方の手が離れた。代わりに、シャツの裾から滑り込んでくる。

素肌に触れた指先が冷たかった。

「あっ……♡」

「温めます♡」

手のひら全体が脇腹に当てられ、体温がゆっくりと移ってくる。

それだけで、腰が揺れた。朝比奈さんの手は急がなかった。

ゆっくりと肋骨の際をなぞり、胸の中央を指の腹で押さえ、また脇腹へ戻る。どこに触れるか予測できない動きに、待っているだけで体が熱くなっていく。

指先が上がってくるたびに次の場所を先読みしようとして、外れるたびに息が詰まった。焦らされているのだと気づいても、どうすることもできなかった。

「ここ♡」

乳首の際で、指先が止まった。

「さわ、らないで……っ♡」

朝比奈さんは指を動かさず、顔を上げて僕の返事を待った。口にした言葉と、伝えたいことがうまく重ならない。

僕は一度息を吸い直した。

「ひっ……♡んっ……♡ちゃんと、触れてください……っ♡もっと……っ♡」

指先でそっと触れられた。

「あんっ……！♡」

「敏感ですね♡」

朝比奈さんが確かめるみたいに言った。

指が離れ、また触れる。軽く、けれど確実に、そこだけを何度も弄る。

触れるたびに体が小さく跳ねて、離れるたびに次を待ってしまう。待ちながら、さらに熱くなる。

「ちゃんと、どうしてほしいですか♡」

「……強く、してほしい……っ♡もっとちゃんと、
摘んで……っ♡しこしこして……っ♡」

きゅうっ♡

「ひあっ……！♡」

乳首を指先で摘み上げられ、ゆっくりと引かれた。
引いたまま、小さく転がされる。

甘い息が漏れた。思ったより大きな声だった。

「あっ♡あっ♡声が……っ♡外に……っ♡」

「我慢できますか♡」

「……む、り……っ♡」

「じゃあ、ここを嚙んでいてください♡」

朝比奈さんが肩口を僕の口元へ寄せた。パーカー
の厚い布が、唇に触れる。

(囓む……？♡)

迷っている間に、指先が乳首をぐりっ♡と捻った。

「ひっ……！♡」

咄嗟に布へ囓みついた。パーカーの生地がぐっと
歯の間に入り、くぐもった声が布に吸われた。

「そのまま♡」

朝比奈さんが静かに言って、指の動きが本格的に
始まった。

しこしこっ♡ぐりっ♡きゅうっ♡しこしこっ♡

「んっ……！♡んうっ……！♡」

布越しに息が漏れる。外まで届いていないと信じたかった。

朝比奈さんの肩に顔を埋めたまま、指先の動きに

全身が揺れる。

ぐりぐりっ♡きゅううっ♡しこっ♡しこしこっ♡

「んひっ……！♡んっ……！♡んあっ……！♡♡」

布を噛みしめる力が強くなった。朝比奈さんはそれを感じているはずなのに、指の動きを緩めるところか、先端の際を擦り上げ、爪で軽くひっかいてくる。

次が読めないまま、体だけが正直に反応し続けた。堪えきれず布から口を離すと、熱い息と一緒に声がこぼれた。

「んううっ……！♡もう、隠せな……っ♡あっ……！♡」

「漏れそうなら、もっと強く噛んでいていいです♡」

こぼれた声を隠すように、もう一度肩へ顔を押しつけた途端、手首を押さえていた手も胸元へ移った。両方の乳首を同時に摘まれ、きゅうううっ♡と力を

込められた。

「んぎっ……！！♡♡」

布に顔を押しつけたまま、くぐもった悲鳴が漏れる。屋根を叩く雨音がすべてを覆い、その内側で朝比奈さんの息だけが近かった。

しこしこしこっ♡ぎゅううっ♡ぐりっ♡しこしこっ♡きゅっ♡

「んっ……！♡んう……！♡両方、ずっと……っ！♡♡」

片方を摘んだまま引き続け、もう片方は指の腹で素早く往復させる。左右で別の刺激が来て、どちらに集中すればいいかわからなくなった。

肩へ顔を埋めたまま、布を噛みしめる力が強まる。
きゅううっ♡しこしこっ♡ぐりぐりっ♡しこしこしこっ♡きゅっ♡

とうとう堪えきれず、布から唇を離した。

「んうっ……！♡んひっ……！♡♡朝比奈さんには
……っ♡聞こえてる……っ♡♡」

「雨音にかき消されても、俺には聞こえています♡」

耳元で、そう言われた。その言葉が頭に落ちた途
端、体の奥がきゅうっ♡と縮んだ。

肩へ顔を押しつけたまま、無意識に朝比奈さんの
腕へ手が伸びる。縫るみたいに、その腕をつかんで
いた。

「腕、つかんでいていいです♡」

朝比奈さんが、当たり前みたいに言った。

「んうっ……！♡」

つかんだ腕が動き、胸を弄る指の位置が変わった。
両方の乳首を同時に摘んだまま、きゅうううっ♡と
強く引き上げられた。

「んぎっ……！！♡♡んあっ……！！♡♡引っ張った
ら……っ♡乳首が……っ♡だめ……っ♡♡」

「引っ張ったほうが、いいですか♡」

「……わかんない……っ♡でも、声が……っ♡おか
しく……っ♡♡」

声を隠そうと肩へ唇を押しつけても、自分でわか
るほど音が高くなる。朝比奈さんが耳元で低く笑う
気配がした。

「おかしくなっていていいです♡」

きゅうっ♡ぐりぐりっ♡しこしこっ♡ぎゅううう
っ♡

「んうううっ……！！♡♡両方、強い……っ♡捻ら
れて……っ♡♡んひっ……！！♡」

腕をつかんだ指が、じわりと白くなるほど力んで
いた。それでも朝比奈さんは振りほどかず、縫られ

るまま体を支えている。

柱に背中を押しつけ、どうにか足を踏ん張っていた。

「んうううっ……！♡んひっ……！♡♡強い……っ♡もう、声……っ♡止まらな……っ♡♡」
「そのまま聞かせてください♡」

両方の乳首をぎゅうううっ♡と同時に強く引かれ、そのまま揺らされた。

「んぎっ……！！♡♡んあっ……！！♡♡揺らしたら……っ♡だめ……っ♡そんなの……っ♡♡」

雨脚が一段強まり、屋根を激しく叩き始めた。

これなら外へは届かない。その安心が、最後に残っていた理性までほどいていく。

「んうううっ……！！♡♡もう、止められない……っ♡♡」

「止めなくていいです♡雨が隠してくれますから♡」

淡々と言いながら、指の動きが一段速くなった。

きゅうっ♡ぐりぐりっ♡しこしこしこっ♡ぎゅう
ううっ♡くりっ♡しこっ♡

「んうううっ……！！♡♡んひっ……！♡♡だめ…
…っ♡速い……っ♡両方ずっと……っ♡乳首がっ…
…♡♡」

「まだ我慢できますか♡」

「……む、ずかしい……っ♡♡もう……っ♡乳首だ
けで……っ♡おかしくなってる……っ♡♡」

「じゃあ、下も触っていいですか♡」

低い声で訊かれた。

(下♡この状況で、下を——♡)

答えようとした途端、また乳首を摘まれ、代わりにくぐもった声が出た。

「んっ……！♡……い、いい、です……っ♡」

胸元にあった片方の手が離れ、そのままズボンのベルトにかかった。迷いのない手つきで外され、ボタンが開き、ファスナーが下りる。

下着ごと引き下ろされて、夜の空気が素肌に触れた瞬間、鳥肌が立った。

「冷たい……っ♡」

「すぐ温めます♡」

朝比奈さんの手のひらが太ももの内側に当てられた。

「あっ……♡」

ただそれだけで声が出た。手のひらの温かさが内側から染み込み、指先がゆっくりと股間へ向かってくる。

太ももの内側を撫でながら、指先は少し上がって

は戻る。次に触れられる場所がわかるからこそ、待つ時間まで熱を持った。

「まって……っ♡わかってるから……っ♡余計、待っちゃう……っ♡♡」

「何を待っているんですか♡触れてほしい場所を、言ってみてください♡」

「……そんな……っ♡言えない……っ♡」

「言えないなら、もう少し焦らしますが♡」

指先が太ももの中ほどで止まった。

「……あっ♡……そこ、じゃなくて……っ♡もっと上……っ♡♡一番敏感なところ……っ♡♡」

「はい♡」

指先が、勃起上がった先端へ直接触れた。

「あっ……！♡」